

I 青谷上寺地遺跡第 19 次発掘調査概要報告

門脇 隆志・高橋 章司

1 はじめに

国史跡 青谷上寺地遺跡は、「地下の弥生博物館」とも称されるほど豊富かつ多様な遺物を出土する遺跡として全国的に知られる一方で、これまで発掘調査が実施された箇所は遺跡範囲の 6%程度であり、集落の全容には未だ不明な部分が多い。このため、平成 28 年度以降は、「史跡等内容確認調査」として、史跡整備に必要なデータを得るため「東西南北」のエリアごとに設定した調査課題（図 1）に即した発掘調査を実施している。特にそれまで本格的な発掘調査が実施されていなかった北エリアについては、港湾施設の確認も含め、集落様相の解明が期待された。

この北エリアを対象とし、平成 30 年度及び

令和元年度に実施した第 18 次発掘調査では、古墳時代前期前葉の造成跡を確認した。この造成土上面では、2 基の柱穴、1 条の杭列を検出したものの、限られた調査区内においてその性格を解明するに至らず、造成工事の目的の解明が課題として残された（門脇・大野 2020）。

第 19 次発掘調査区は、これらの課題を解明すべく、第 18 次発掘調査区の西側に隣接する宅地跡に、上端 693㎡（32.4 m × 21.4 m）、調査面積 136㎡（17 m × 8 m）で設定したものであり、発掘調査は令和 2～3 年度の 2 カ年で実施した。

2 調査の目的と経過、方法

令和 2 年度の調査（主要調査期間：9 月 14

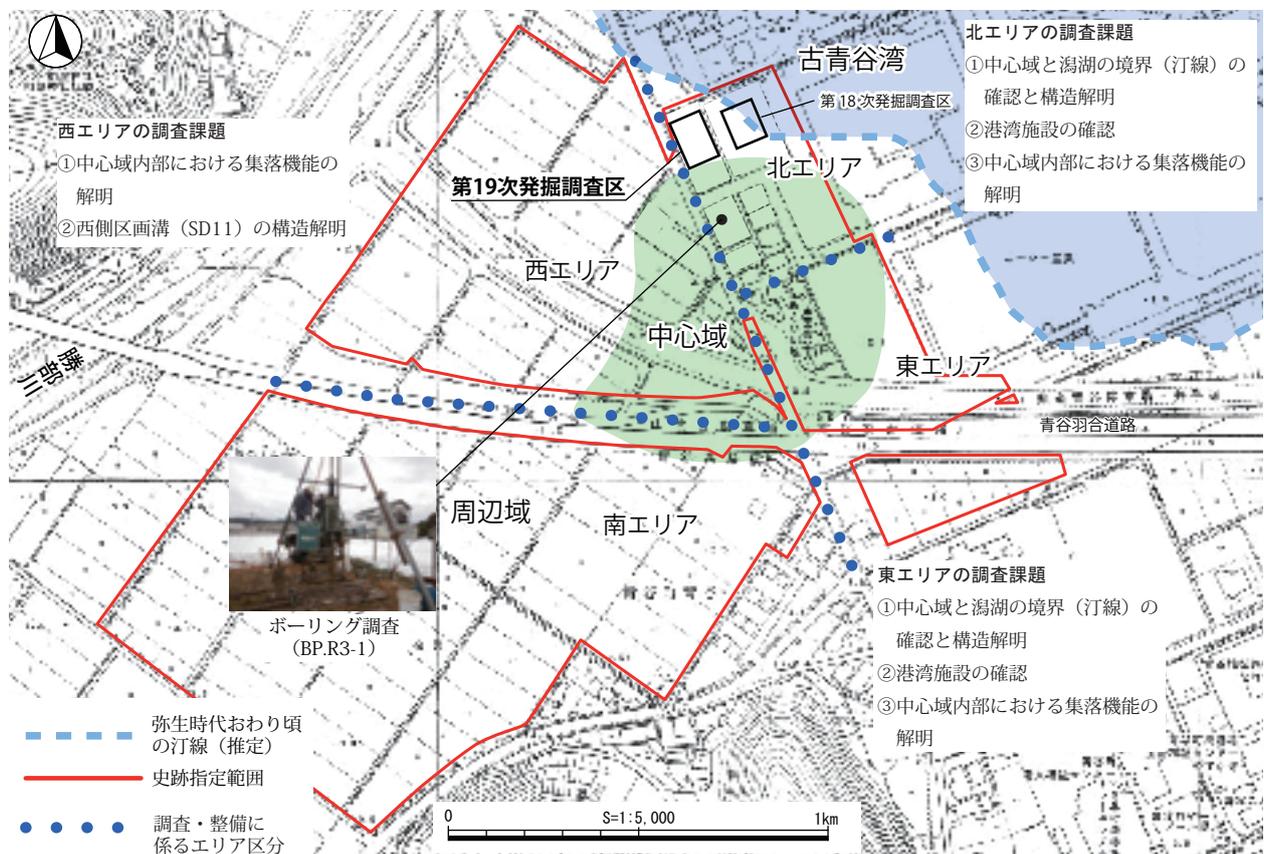


図 1 調査・整備に係るエリア区分と北エリアの調査

日から12月4日まで)は、集落北エリアの実態を明らかにするため、①中心域(弥生人の主な活動の舞台となった微高地)北側における海際の地形を確認する、②第18次発掘調査で確認した古墳時代前期前葉の造成範囲とその目的に関する情報を得る、③古墳時代から古代にかけての土地利用の様相を明らかにする、の3点を目標として実施した。

地表面(標高約2.7~3.1m)からの客土及び耕作土(標高約0.8~1.1m)までを重機掘削の、それより下層を人力掘削の対象とした。上層の調査は中世の耕作土であるⅡ層上層の下面において1条の畦畔痕跡を確認した。その後、調査区四周の排水溝設置予定箇所を先行して掘削したところ、黒褐色系のシルトあるいは細砂主体層の下に、黄褐色系の造成土の広がりを確認した。この造成土上で古墳時代前期のものと思われる溝、ピット等の多数の遺構を検出したため、排水溝の掘削を中止した。調査区内については、第18次発掘調査区で確認した黒褐色系の造成土と同一層と捉えていた黒褐色シルト混細砂層までの掘削およびその上面での遺構検出を行った。

続く令和3年度の調査(主要調査期間:令和3年5月17日から8月6日まで)では、前年度の成果を踏まえ、①造成面に残された土坑群をはじめとする遺構群の前後関係及び性格の解明、②造成の構造および第18次発掘調査区で確認された造成土との関連性の解明、③弥生時代後期後葉の堆積状況の確認の3点を調査課題に設定した。

調査の結果、令和2年度の調査で黒褐色系の造成土と認識していた層のうち、上層は古墳時代中期後葉から後期前葉の耕作土(Ⅲ層)、下層は古墳時代前期後葉までの流入土(Ⅳ層)であることが判明した。この2つの大別層の掘削によって調査区全体が前年度先行して掘削した調査区四周と同一面となった。標高0.6~1.0mを測る造成土上面において、新たに多数の遺構を検出し、前年度検出していた遺構も含め調

査を行った。さらに、遺構調査後に遺構の密度が比較的薄かった調査区西壁に沿って幅1.0mのトレンチを最深部で標高0.4mまで掘削し下層確認を行った。調査終了後、陸砂によって遺構面を保護したのち、真砂、排土によって埋め戻し原状に復した。

また、本調査を補充する目的で、令和4年2月18日~2月21日に調査区の約40m南側で、標高3.11mの地表面から掘削深度6.0mのボーリング調査を行った(BPR3-1、図1)。

以下、2カ年の発掘調査で得られた成果の概要について記述する。

3 基本層序と造成土

(1) 基本層序

地表面から約1.2mの厚さで堆積する現在の宅地造成の客土より下に以下の大別層を確認した(図2)。

Ⅰ層…中世以降の耕作土層だが、出土遺物が少なく、時期は明確にしえない。

Ⅱ層…黒褐色シルトを主体とする耕作土層で、渡来銭や中世土器、貿易陶磁器の細片を僅かに含む。上下2層に細分され、上層の下面を第1面とした。

Ⅲ層…黒褐色砂質シルトの均質な層で摩滅した土器片を含むことから下層のⅣ層を母材とした耕作土層とみられる。僅かに古墳時代中期後葉から後期前葉の須恵器片を含む。

Ⅳ層…黒褐色細砂を主体とする流入土とみられる。古墳時代前期前葉のものを中心としながら、古墳時代前期後葉までの土器片を含む。

Ⅴ層…DKP(大山倉吉軽石)や白色ロームなどの丘陵上の堆積を母材とする造成土である。当層の上面を第2面とし、古墳時代前期前葉に属す多数の遺構を検出した。

Ⅵ層…黒褐色細砂を主体とし、一部にラミナ構造が認められる。堆積の状況からも流路を起源とする水成堆積とみられる。弥生

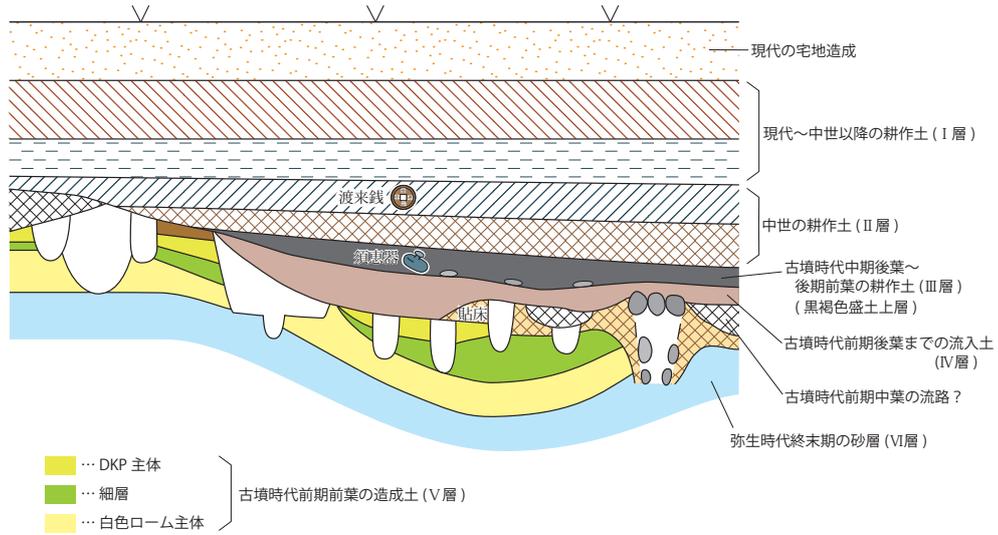


図2 基本層序模式図

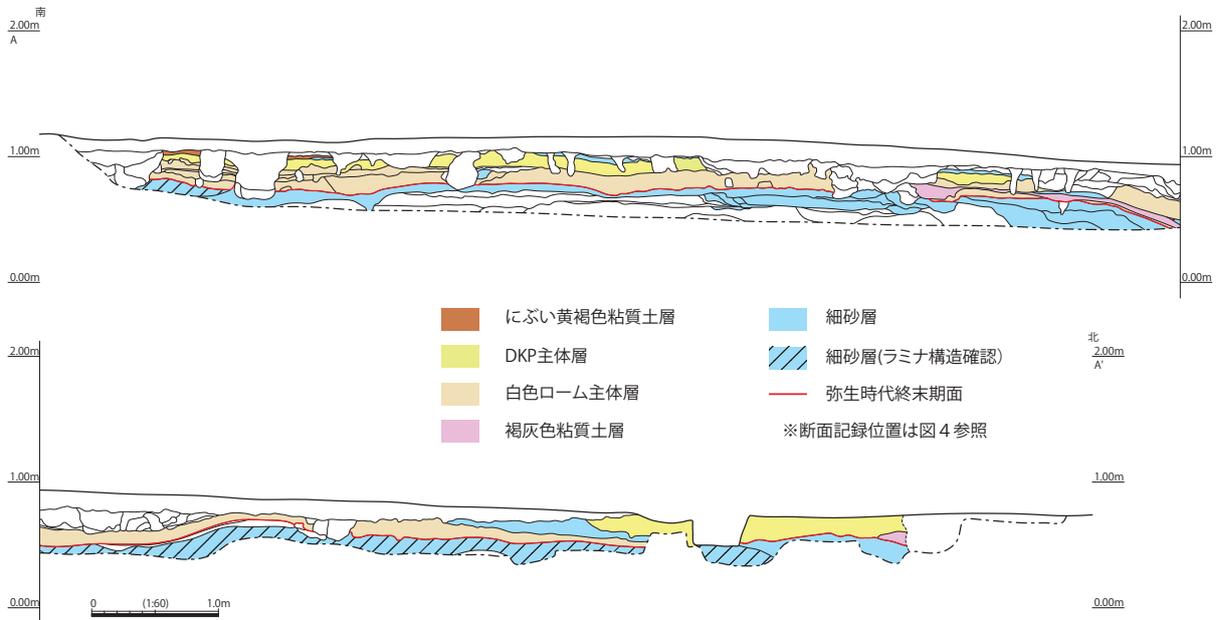


図3 調査区西壁際トレンチ土層断面図



写真1 調査区西壁際トレンチ土層断面 (南東から)



写真2 第18次発掘調査区の造成痕 (南東から)

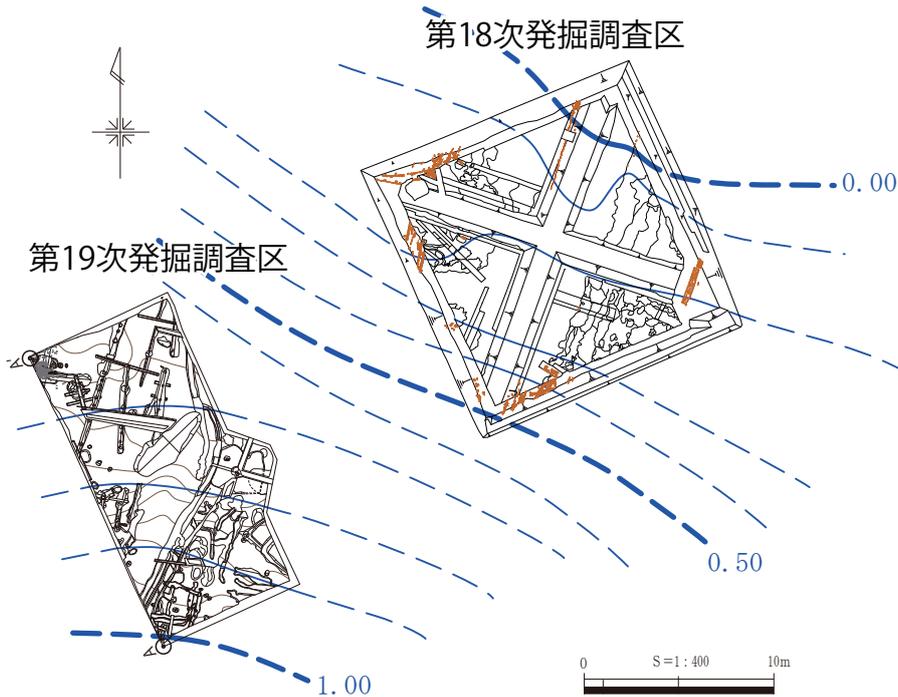


図4 古墳時代前期前葉の推定地形図

時代後期から終末期までの土器片を含む。

(2) 古墳時代前期前葉の造成土と古地形

調査区西壁際トレンチの掘削によって、造成土（V層）は上層からDKP、灰色系細砂、白色ロームをそれぞれ主体とする土砂を貼り重ねることを基本的な構造としており、その中には木製構造物が一切入らないことを確認した（図3、写真1）。このような造成構造は、第18次発掘調査区の木製構造物で補強した土手状盛土を基礎とする造成（写真2）と明瞭に異なる。また、第19次発掘調査区で確認した造成土は、層厚が最大30cm程になる堆積でありながら、調査区の約40m南側で行ったボーリング調査地点（BP.R3-1）まで及ばないことが判明した。このような近接する地点における様相の違いは、古地形における標高差に起因するものと考えられる。いずれの地点においても確認した弥生時代終末期の黒褐色系細砂層上面の標高はBP.R3-1地点で1.2m、第19次発掘調査区で0.8～0.3m、第18次発掘調査区で-0.1mを測り、当該期には概ね北東方向に下がる地形であったことが分かる。

最も標高の高いBP.R3-1で造成土が確認されなかったのは、造成の目的が微高地の裾部にあたる中心域北側の拡張であったためとみられる。また、第18次・第19次発掘調査区における造成構造の違いは、古青谷湾との距離によるものの可能性がある。標高が低い、すなわちより古青谷湾に近い第18次発掘調査区では、波打際に近いことや、海際から搬入しやすい細砂を多く用いたこともあり、木製構造物で補強しながら造成を行う必要があったのではなかろうか。

第19次発掘調査区で確認した造成土上面の標高から作成した推定地形図が図4である。第18次発掘調査では造成によって最大60cm程度土地が嵩上げされたことが確認されているが、第18次発掘調査区の造成面は第19次発掘調査区のそれより標高にして概ね0.6m低く、弥生時代終末期の古地形は完全には解消されなかったことが見て取れる。次に述べる造成土上で検出した遺構の様相からは、土地利用がこの高低差に則してなされていたことが分かる。

る遺構群が検出され、遺構周辺に火を焚いた痕跡とみられる赤褐色を呈す焼土が点在していることを確認した。以下、本稿ではこれらのうち、土地利用の在り方を示す主な遺構について記述する。

39・40 溝 (図6・7、写真3～5)

調査区北東部において検出した、南北方向を基軸として 1.9 m 間隔で平行する 2 本の溝であ

る。検出状況から東側の 39 溝は白色ローム主体の薄黄色造成土と白色粘土を、西側の 40 溝は DKP 主体の濃黄色造成土を掘り込んでいることが確認できる。39 溝は最大幅 0.24 m で南北方向(N -15° - E)に走り検出長 4.9 m を測る。40 溝は幅 0.29 ~ 0.65 m で南北方向 (N -20° - E)に走り検出長 3.3 m を測る。39 溝では 2 基、40 溝では 4 基の柱穴を検出したことから、布掘建物の可能性が考えられる。なお、39・40

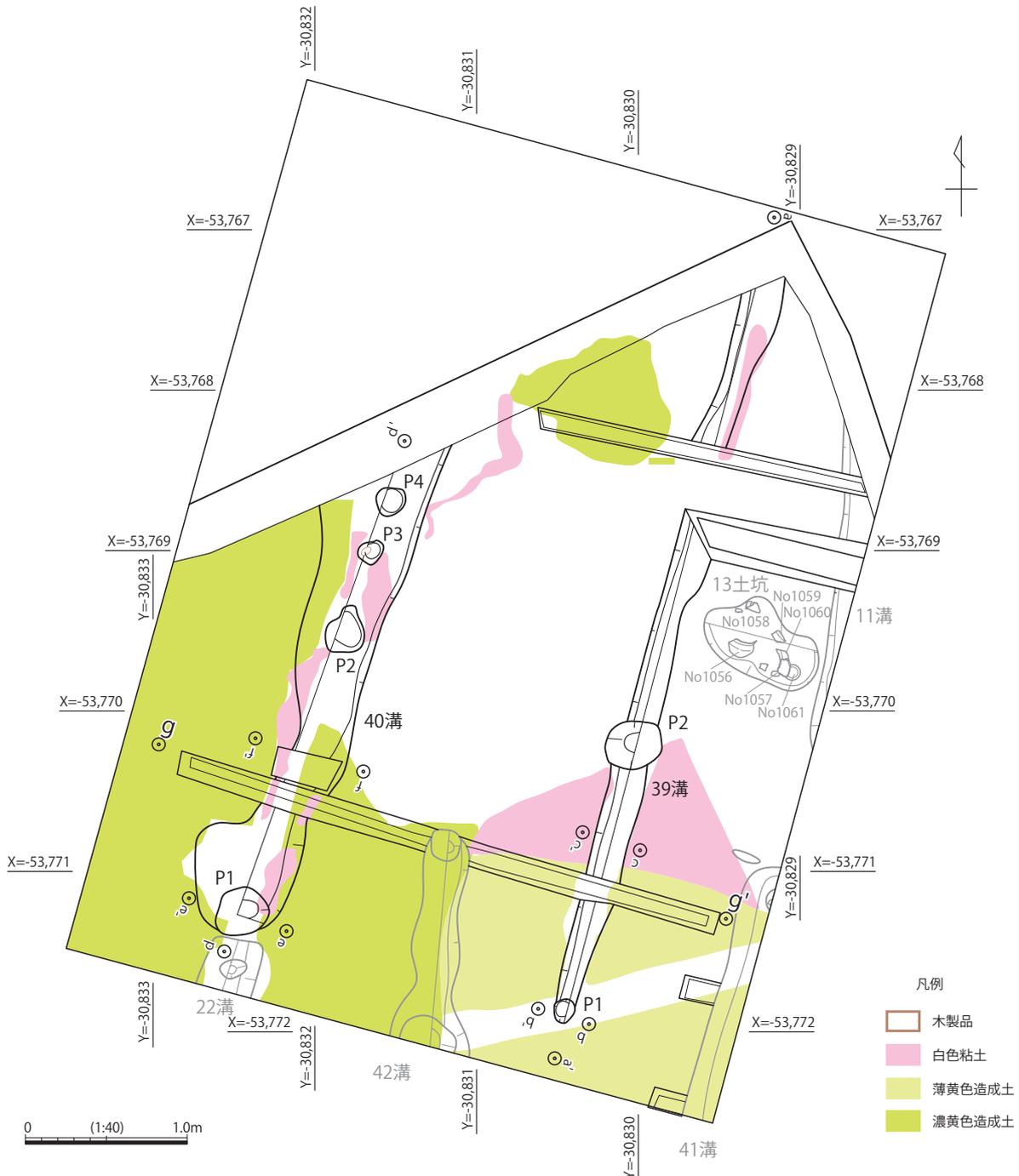


図6 39・40 溝平面図

溝とも白色粘土ブロックを含む埋土を平面的に検出しており、その一部に溝の長軸方向に板を立てた痕跡とみられる間隙を認めた。調査区北端付近では溝間に濃黄色土を厚く張っている部分がある。布掘建物であるならば、板壁立ちで土間床をもち、吹き抜け構造の建物であると推定できる。

39 溝の底面は柱穴を除き検出面からの深さ

は 18cm 程度で平坦である。柱穴の深さは底面から 4 ~ 20cm と幅がある。溝埋土は黄灰色 ~ 灰黄色細砂を主体とするが、柱穴は粘質土あるいはローム塊を含む埋土で充填されている。

40 溝の底面は、柱穴を除き検出面からの深さは 15 ~ 25cm である。柱痕の深さは底面から 6 ~ 15cm を測る。粘質土を主体とする埋土のなか、断面 d-d'・f-f' において板材の痕跡と

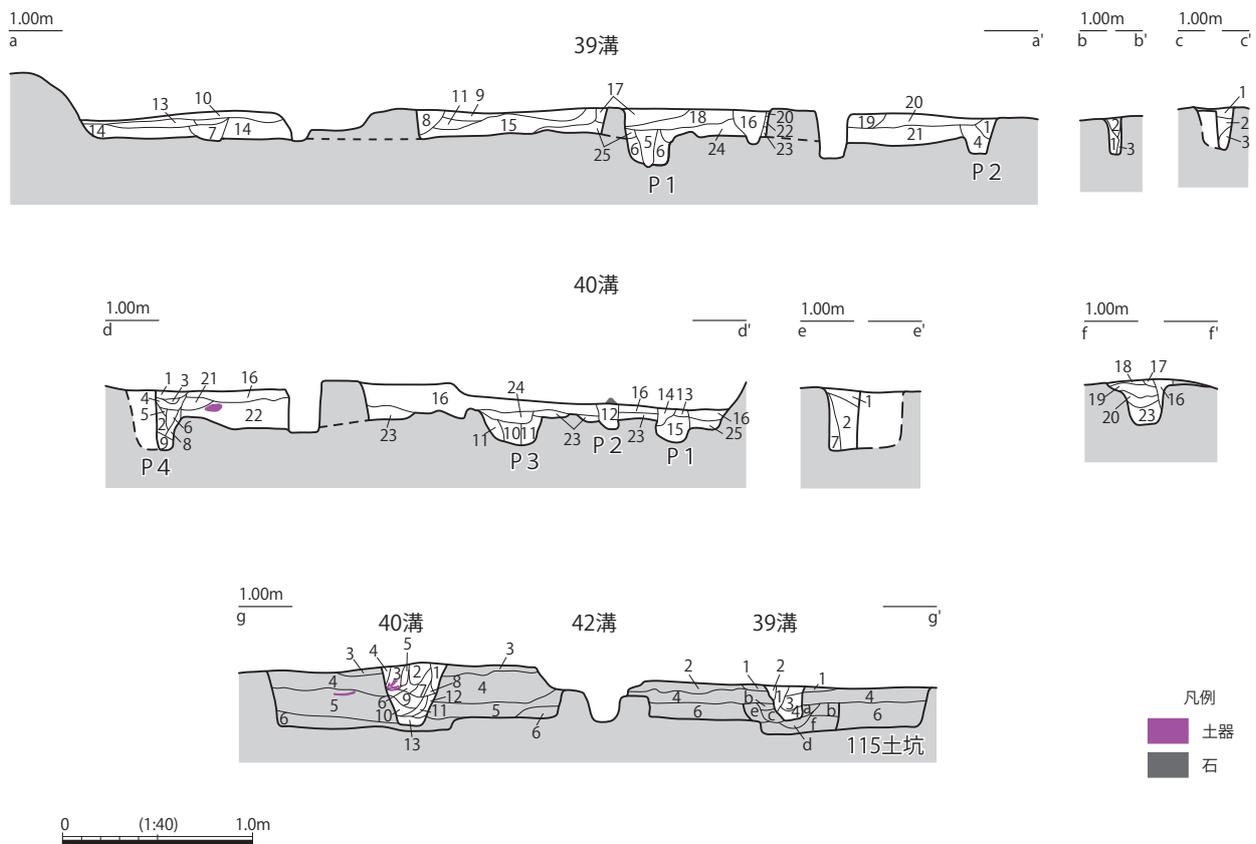


図 7 39・40 溝断面図



写真 3 39・40 溝土層断面 (南西から)



写真 4 40 溝北半部 板痕検出状況 (北東から)

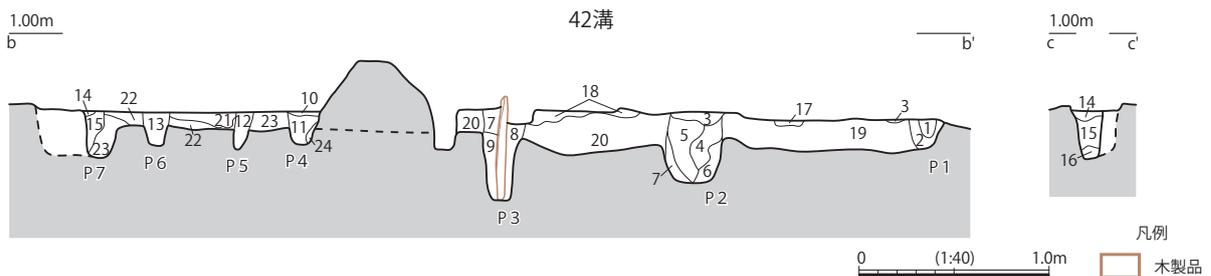
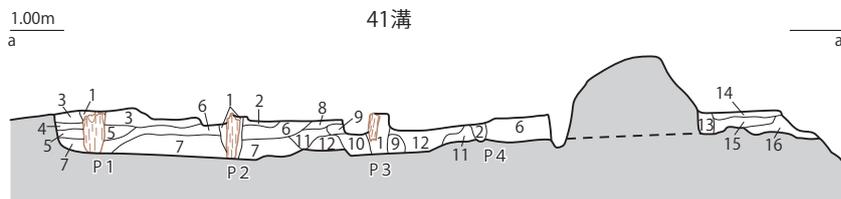
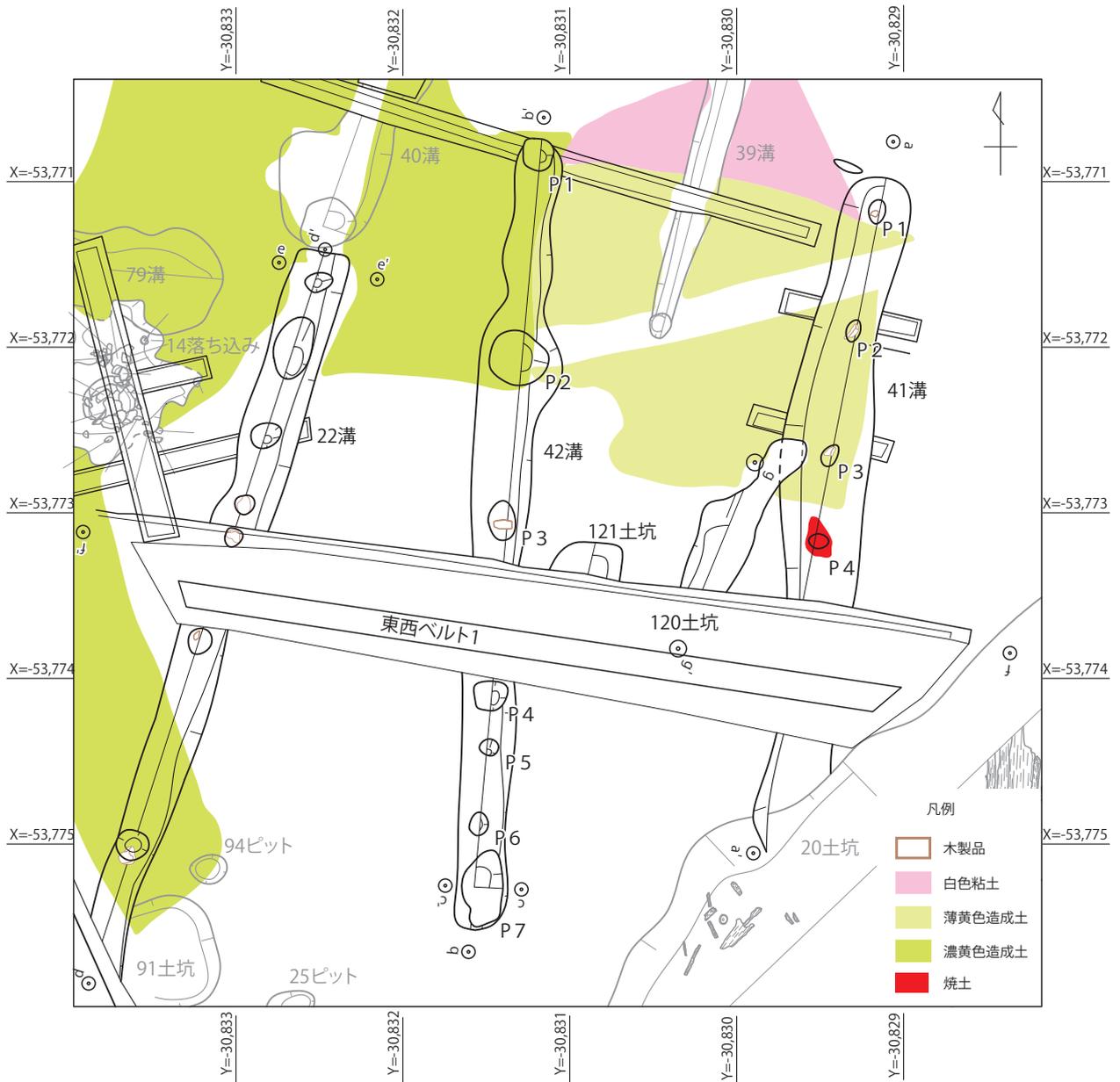


図8 41・42 溝平断面図



写真5 39・40 溝検出状況 (北東から)



写真7 41 溝柱材検出状況 (南西から)



写真6 41・42 溝検出状況 (北から)

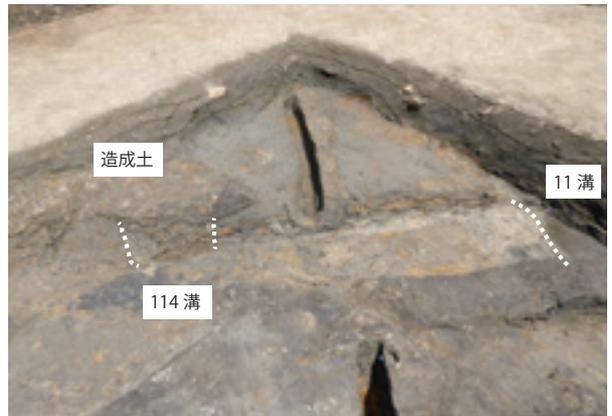


写真8 11・114 溝土層断面 (南から)

みられる 16 層を確認した。東西方向の断ち割り断面 g-g' では、両溝ともに板材の痕跡があること (39 溝：1 層、40 溝：3 層) を確認した。また DKP を多量に含む造成土 (1～3 層) 下に灰色細砂層 (4 層) が堆積していること、その下面に粘性土層 (5・6 層) を基盤とする遺構 (115 土坑) を確認できることから、造成を繰り返しながら土地を利用していたことがうかがえる。

41・42 溝 (図8、写真6・7)

調査区中央北よりで検出された概ね 2.2m の間隔で南北方向に平行する溝であり、39・40 溝と同様に布掘建物の可能性が考えられる。40 溝の基盤層である濃黄色造成土の掘削により、42 溝の北半部を検出した。また濃黄色造成土の下位に堆積する薄黄色造成土上では、41 溝の柱材の残欠を伴う柱痕を検出するのみであったが、同造成土を掘り下げること

41・42 溝のプランを検出した。このことから薄黄色造成土は布掘建物の貼床である可能性が考えられる。その上面では炭化物を多量に含む 120 土坑と、焼土を多く含む 121 土坑を検出した。どちらも布掘建物の床面に設けられたものと考えられる。

42 溝は幅 0.22～0.50 m で南北方向 (N - 5° - E) に走り、検出長 5.40 m を測る。41 溝は、42 溝よりやや東に振れ (N - 10° - E)、幅 0.36～0.53 m の幅で走る。南端は 20 土坑に切られており、検出長は 4.80 m を測る。41 溝では 4 基のうち 3 基 (P 1～3)、42 溝では 7 基のうち 1 基 (P 3) の柱穴に柱材の残存を確認した。このうち、41 溝の柱材はいずれも腐朽して中心部分しか残っていなかったが、黒色土の柱痕として認識でき、直径 12cm 前後であることが分かる。これに対し、42 溝 P3 の柱材は長さ 56cm、幅 15cm、厚さ 5 cm の頑丈な角材であった。

41 溝の底面は検出面からの深さ 10～28cm で柱穴部分の底面は平坦である。埋土は黄灰色～暗灰黄色粘質土を主体とし、ローム塊を含む。42 溝の底面は検出面からの深さ 8～24cm であるが、P1 を除いて柱穴部分が大きく底面を掘りこんでいる。底面からの深さには幅が大きく、P2 で 24cm、P4～6 で 10～12cm、P7 で 18cm、柱材が残存する P3 は 36cm を測る。埋土は黄灰色粘質土を主体とする。

11・114 溝 (図9、写真8)

調査区北東隅の東側側溝内で検出した 11 溝は、南北方向 (N - 5° - E) を基軸とし、最大幅 0.48 m、検出長 2.20 m、検出面から溝底面までの最大深は 36cm を測る。南端部に溝底面からの深さ 17cm を測る長軸 0.4 m の柱

穴があり、その底面直上に礎板とみられる板材を検出した。埋土は黄灰色細砂を主体とするが、a-a' 断面では柱痕跡である 12 層に沿って、根固めとみられるローム塊を極めて多量に含む 4 層を確認できる。

東西方向のトレンチ (断面 c-c') にて、11 溝の 1.6 m 西側で、39・40 溝の基盤層である造成土 (1・2 層) 下に幅 0.37 m、深さ 19cm を測る溝状遺構 (114 溝) の断面を確認した。11 溝・114 溝については、遺構の状況および層序関係から 39・40 溝の前段階の布掘建物の可能性が考えられる。

竪穴建物 1 (図10、巻頭図版2-1)

調査区東壁中央付近、調査区南西隅から中央部の緩斜面と調査区北半部の平坦面の境界に位

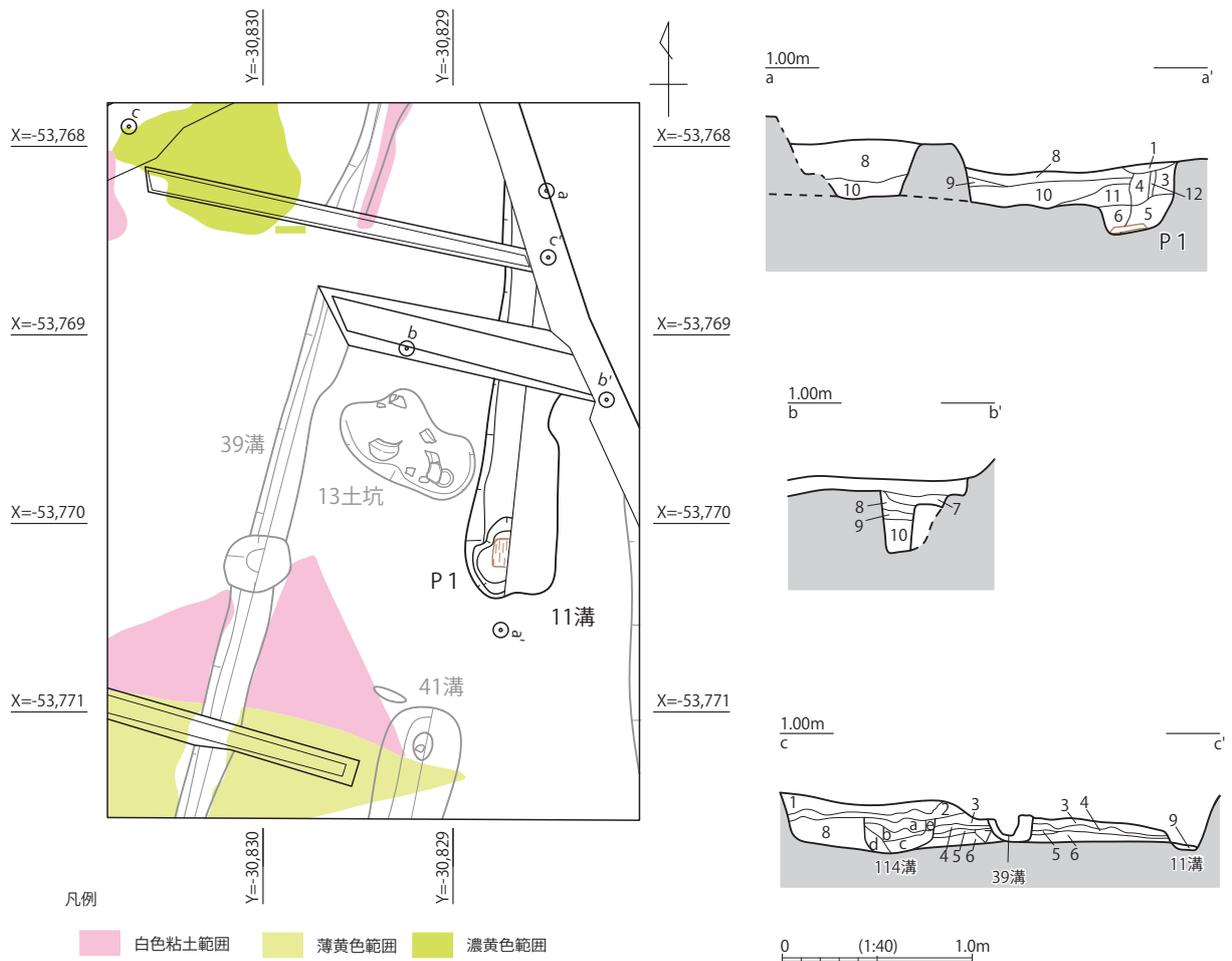


図9 11・114 溝平面断面図

置する。DKPを主体とする造成土上で検出した。南東側の一部が攪乱を受けているが、南北方向に最大2.24 m、東西方向に最大2.26 mを測る不正方形の平面形を呈し、北辺の中央部が内側に0.5 m程度スロープ状に張り出す。検出面から床面までの深さは最大で16cmを測る。

底面の北西側では、掘削によって露出した造成基盤層（弥生時代終末期の砂層）上に白色ロームをはじめとする粘性の高い土砂で施された最大厚13cmの貼床を確認した。縦穴が浅いのは、脆弱な基盤層まで掘削が及ぶのを避けたためであろう。

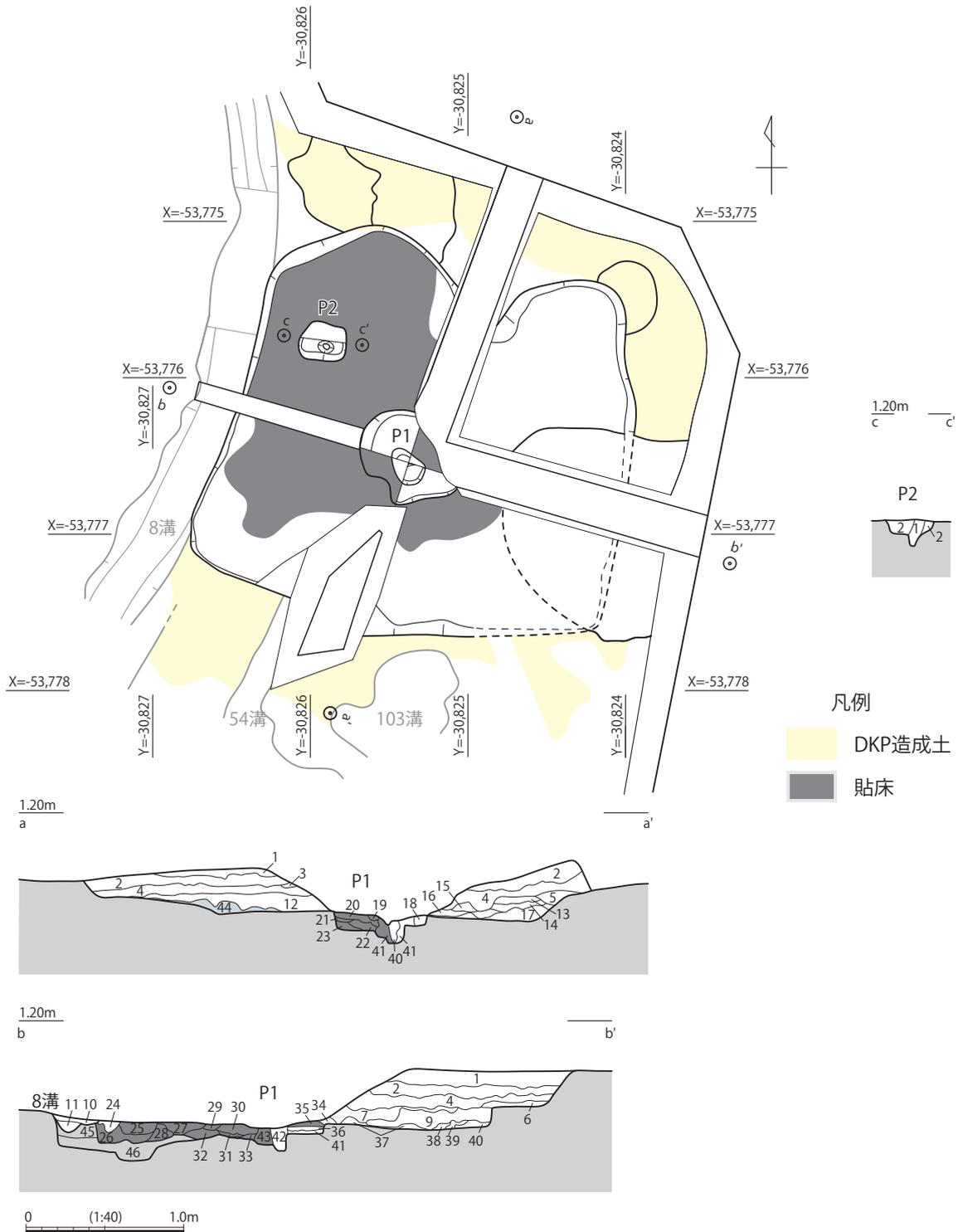


図10 竪穴建物1平断面図

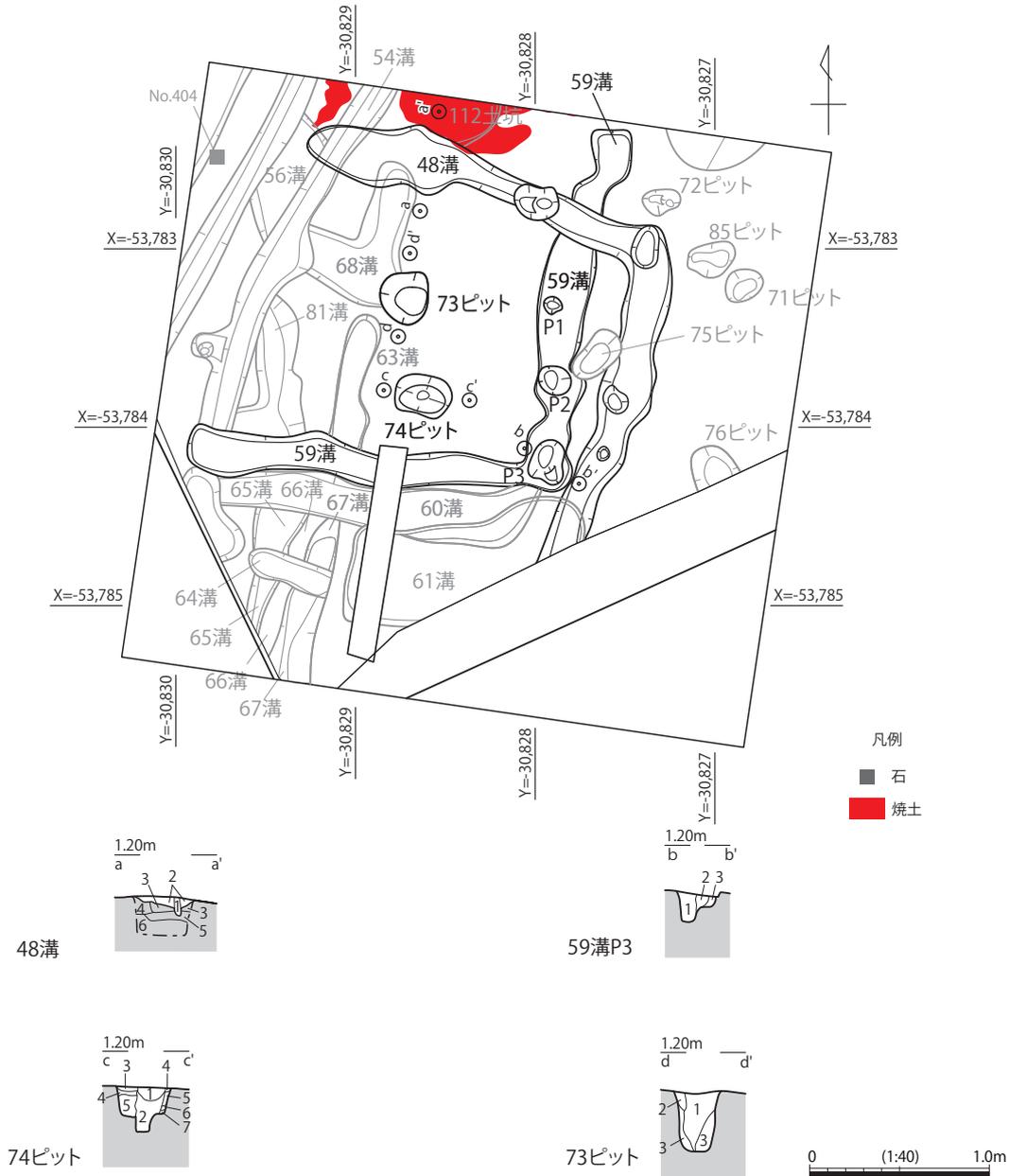


図 11 48・59溝、73・74ピット平断面図

底面では中央部に P1、北西部に P2 を検出した。P1 は長軸 0.60 m を測る不正円形の平面形を呈し、中央部には長軸 0.26 m、短軸 0.18 m を測る柱痕を確認した。柱痕はごくしまりの悪い土が詰まっている一方で柱混の周囲には非常に固い白色粘土が詰められている。床面からの深さは、柱痕部で 20cm を測る。P1 は柱痕部の周囲で平坦だが南側と東側は 6 cm と浅く、北側と西側は 12cm 程度と深い。

P2 は長軸 0.30 m、短軸 0.24 m の不正楕円形の平面形を呈し、中央部に柱痕を確認した。

床面からの深さは底面で 9 cm、柱痕部で 17 cm を測る。P1 に比べ小さいため、補助的なものと推定される。

竪穴建物としては規模が非常に小さく、床面に火を焚いた痕等もないことから、住居として用いられたものであるかは不明である。

48・59溝、73・74ピット（図 11、巻頭図版 2- 2）

調査区南西部では 48 溝、59 溝はじめ直角に曲がる溝を中心とする遺構群を検出した。これらの溝は、地形的に高い位置にあるため後世

の耕作による掘削を大きく受けているとみられ浅いが、溝内の掘削によって複数のピットを確認した。また、48・59 溝とも、検出したプランから想定される方形の区画の内部で柱穴とみられるピット（74・73 ピット）を検出した。このことから 48 溝と 74 ピット、59 溝と 73 ピットはそれぞれ平地建物の可能性が考えられる。

48 溝は東西方向（N - 70° - W）2.08 m、南北方向（N - 20° - E）2.00 m のプランを検出した。溝の深さは 6 cm 程度と浅いが、板を立てた痕跡（a-a' 断面 1 層）を確認した。溝内に 4 基のピットを検出しており、最も深い P 1 は深さ 10cm を測る。東西方向の溝から 1.08 m 南側、南北方向の溝から 0.82 m 西側の位置に 74 ピットを検出した。

74 ピットは長軸 0.32 m、短軸 0.23 m を測り、中央部に柱痕を確認した。検出面からの深さは、底面で 17cm、柱痕部で 25cm を測る。

59 溝は 48 溝に切られる東西方向（N - 85° - W）2.12 m、南北方向（N - 10° - E）2.05 m のプランを検出した。溝の深さは 3 cm 程度と浅いが、溝内に 3 基のピットを検出している。最も深い P 3 は深さ 18cm を測る。東西方向の溝から 0.75 m 北側、南北方向の溝から 0.61 m 西側の位置にある 73 ピットを検出した。73 ピットは長軸 0.32 m、短軸 0.23 m、検出面からの深さ 35cm を測り、やはり中央部に柱痕が認められる。

その他の主な遺構

22 溝（写真 9）

調査区北西部において検出した溝である。40 溝の南端に近接して同一軸で走り、幅 0.34 m、検出長 4.6 m、検出面から溝底面までの深さは最大で 28cm を測る。溝内で 7 基の柱穴を確認でき、そのうち 4 基に柱材が残存していた。

布掘建物の可能性がある 39～42 溝と類似する遺構であるが、調査区内で対になる溝は確認できなかった。



写真 9 22 溝（東から）



写真 10 89・105 溝（南から）



写真 11 8 溝（東から）



写真 12 69 土坑（東から）

89・105 溝 (写真 10)

調査区南東隅において検出された、いずれも直角に曲がる溝であり、89 溝が 105 溝を切る。両遺構とも南東 - 北西 (N - 45° - W)、南西 - 北東 (N - 44° - E) の同一の方向性をもつ。南東 - 北東方向の部分が重複しており、同じ機能の遺構が僅かに位置をずらして形成されたものとみられる。89 溝は幅 0.44 m、深さ 12cm、105 溝は幅 0.46 m 程度で深さ 18cm を測る。105 溝には屈曲部分に柱穴 (107 ピット) が確認されていることから、48・59 溝と同様、平地建物跡の可能性が考えられる。

8 溝 (写真 11)

調査区西壁南側から南西 - 北東方向に走る溝であり、東壁中央部付近で大きく北側に屈曲し、7 溝に切られる。幅 0.4 m、検出長 11.4 m を測る。検出面からの深さは 12cm 程度で、埋土は細砂を主体とする。当遺構は多数の遺構を検出した調査区南側と、その北側の遺構がまばらな緩斜面との境界に位置する。区画溝か道とみられる。

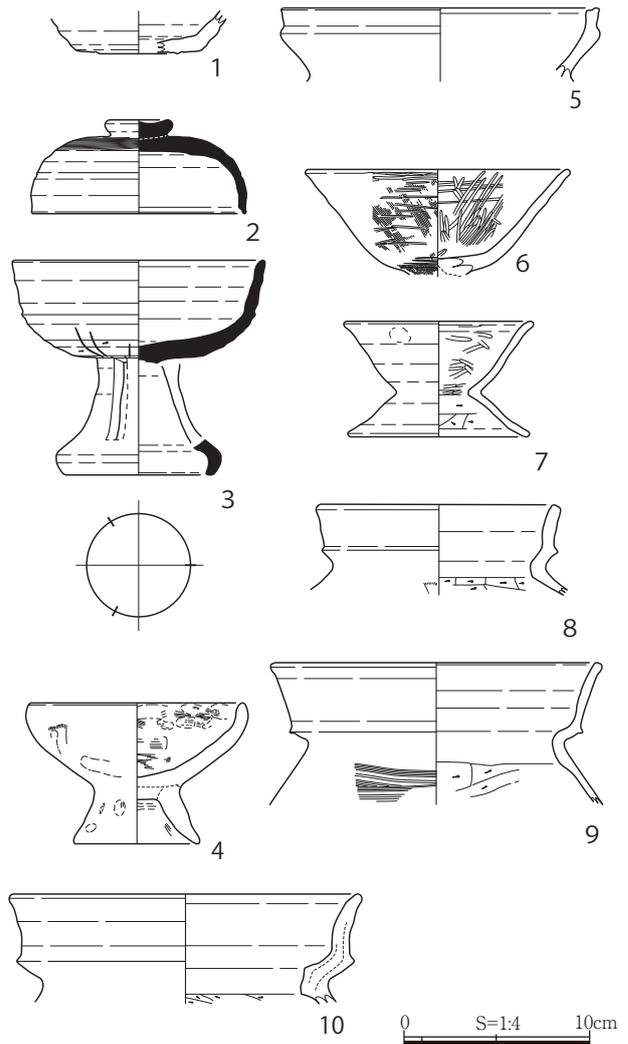


図 12 遺構外出土土器

69 土坑 (写真 12)

48 溝・59 溝の北側で検出された長軸 2.32 m、短軸 1.03 m を測る不整楕円形の平面形を呈す土坑である。断面は逆台形状を呈し、検出面からの深さは最大で 32cm を測る。底面を中心に多数の土器が出土しており、廃棄土坑とみられる。壁面の一部が赤褐色を呈しているのは、ある程度の期間埋められず機能し、被熱したためであろう。

5 出土遺物

ここでは、各大別層、遺構の時期認定の根拠とした土器を記載する。土器の帰属時期については文末に記載した文献によって検討した。

(1) 遺構外出土土器

各大別層から出土した土器を図 12 に示す。

1 はⅡ層から出土した土師器である。内外面ともに回転ナデの痕跡が顕著である。中世に属す。

2～5 はⅢ層から出土した。2・3 は須恵器である。2 の蓋は中央部が凹むボタン状のつまみをもつ。3 は高坏で脚部には長方形の透かしが 2 箇所残存している。いずれも TK23～47 に比定されるもので古墳時代中期後葉から後期前葉に属す。4・5 は土師器である。4 の脚付碗は粗雑なつくりで内面にハケメが残る。古墳時代中期後葉から後期前葉に属す。5 の甕は口縁の立ち上がりが短く、下端が鈍く膨らむ。古墳時代後期に属す。

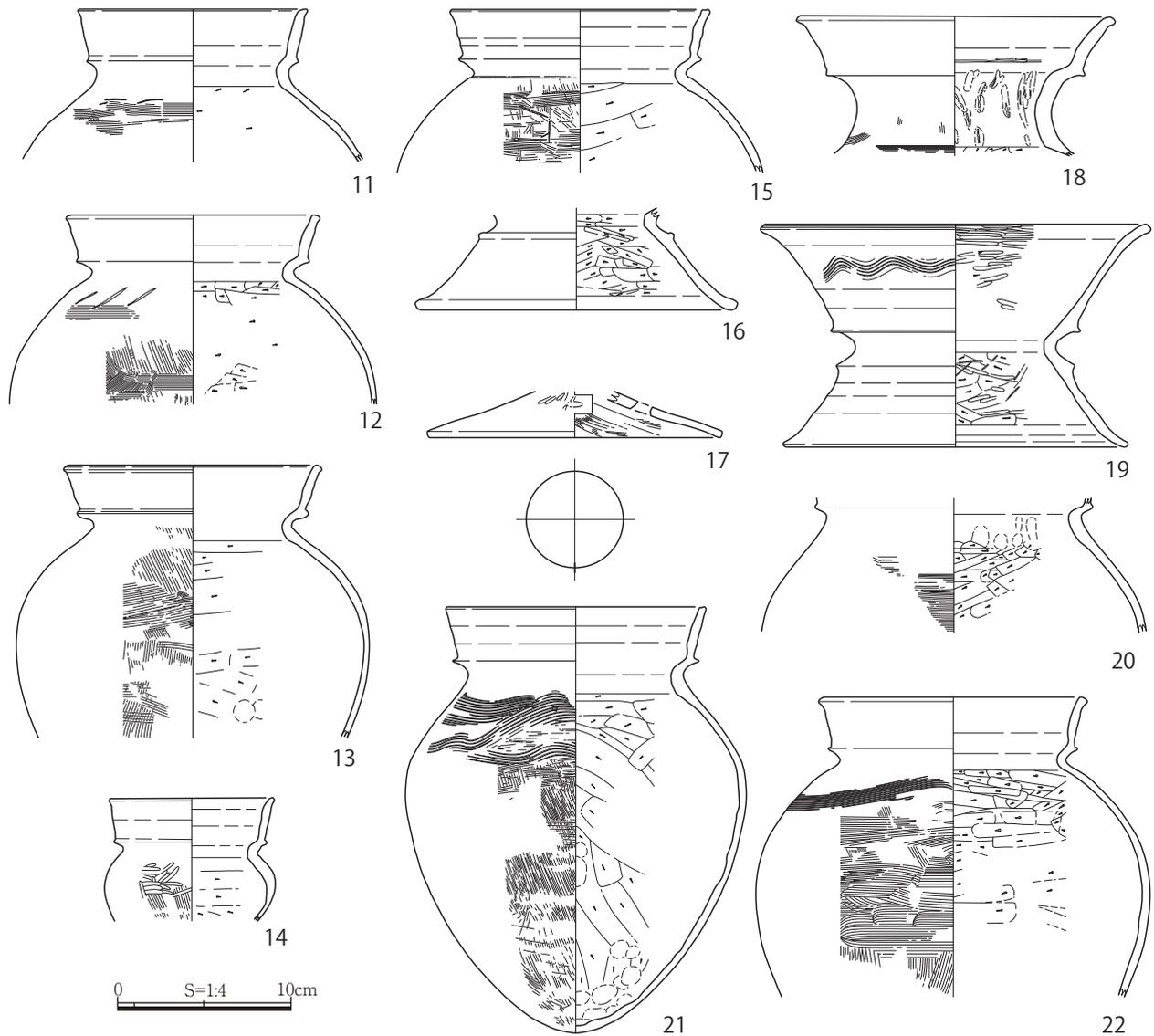


図 13 遺構内出土土器

6～8はIV層から出土した土師器である。6の高坏は逆台形の側面観を呈す杯部をもち、内外面ともミガキで調整される。7は筒部をもたない開地谷型の器台である。6・7は古墳時代前期中葉から後葉に属す。8の甕は器壁が厚く、口縁下端の突出は鈍い。6・7と同時期とみられる。

9はV層の最上層から出土した土師器の甕で、口縁の端部は面取りされ、下端の突出はやや鈍い。肩部には平行沈線が施される。古墳時代前期前葉に属す。

10はVI層から出土した弥生土器の甕である。器壁が厚く、口縁端部は外方につまみあげ整形される。弥生時代終末期に属す。

(2) 遺構内出土土器

造成面上で検出した遺構群から出土した土師器を図 13 に示す。

11～14は40溝から出土した。11～13の甕は、いずれも器壁がやや厚く、口縁端部の平坦面が顕著である。11・12は肩部に平行沈線と刺突文が施される。13の胴部は不定方向のハケメで調整される。14の小型丸底壺はほぼ垂直に立ち上がる複合口縁をもつ。

15～17は竪穴建物1から出土した。15の甕の口縁端部は面取りを意図したナデによって沈線状に凹む。胴部のハケメは不定方向で、肩部に粗雑な刺突文が施される。16は器台でありやや扁平な脚部をもつ。17の高坏は布留系

のもので末広りの脚部に円孔が1箇所穿たれる。

18・19は11溝から出土した。18の壺は頸部下に突帯をもたず、平行沈線が施される。19の器台は器高が高く、脚部の径は受部よりやや小さい程度である。受部外面には波状文が施される。

20は48溝から出土した甕であり、肩部には平行沈線が施される。内面のケズリは胴部に止まり、頸部は指圧痕が多数残る。

21は70溝から出土した甕である。口縁の端部は面取りされ下端の突出は鋭い。胴部は最大径を中位より上にもつ倒卵形を呈し、底部は丸底である。肩部の波状文はやや粗雑で、胴部下半は縦方向のハケメで調整される。

22は69土坑から出土した甕である。口縁端部に平坦面をもち、口縁下端の突出は鈍い。全体の器形は不明であるが、胴部の最大径は中位よりやや上程度であるとみられる。胴部中位のハケメは横方向でやや粗雑である。

遺構から出土したこれらの土師器のうち、18・19はやや古相を残すものの、それ以外のものは古墳時代前期前葉の特徴を示す。

まとめ

第19次発掘調査では、弥生時代終末期層を基盤層とする造成土と、その上に残された遺構群を確認した。

造成土上で確認された遺構群には、竪穴建物だけでなく布掘建物や平地建物を構成する可能性が高いものがある。後2者は同じ性格の遺構が同じ位置で重複しており、造成された土地の分節的な利用状況を示すものとして特筆される。これらの遺構はいずれも古墳時代前期前葉に位置づけられるもので、これまで遺跡の衰退期として捉えられてきた当該期における集落様相の一端が示された意義は大きい。今後は県内を始め、各地の類例を精査することで遺構の性格把握に努めたい。

【参考文献】

- 門脇隆志・大野哲二 2020「第18次発掘調査概要報告」
『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2019』鳥取県
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と
編年』山陽・山陰編、木耳社
牧本哲雄 1999「第9章 遺構、遺物の検討 第1節
古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ 園第
6遺跡』（財）鳥取県教育文化財団
牧本哲雄 「第3節 土器の編年」『鳥取県史』
松井潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第
19集 古代吉備研究会
松村智弘 2018「山陰」『前期古墳編年を再考するⅡ—
古墳出土土器をめぐって—』中国四国前方後円墳研
究会第18回研究集会実行委員会
宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし—陶器
の須恵器—』大阪府近つ飛鳥博物館